News Letter 第162号5年11月
日本ファミリーホーム協議会

研修委員会 リレーコラム VOl.7

里親の醍醐味

石川 浩子

施設職員から里親（平成 21 年登録）になって 14 年が経ちました。たて続けに 2 名の男児を預かったことがきっかけとなり、平成 26 年に主に中高生の男児を預かるファミリーホームはなの家を開設（運営主体：NPO 法人青少年の自立を支える会）し今に至っています。

この間 14 名の児童が委託され、一時保護委託やショートステイ等も含めると 30 名を超える子どもたちとの出会いがありました。どの子もみんな大変な状況を潜り抜けて私たちのところにたどり着いていることに違いはありません。

生活が落ち着いてくるとこれまでのことを語りだす子どもたち・・・「お年玉をもらったことがない」「映画館に行ったことがない」「親の顔を知らない、覚えてない」等々、私たち里親や施設など社会的養護に繋がってくる子は、世の中の多くの子どもたちにとってのありふれた日常からは、かなりかけ離れた状況だったことが手に取るように分かります。

社会的養護に携わる者は、「与えられず、奪われたものを与え取り戻し、傷ついた心を癒せば元に戻るのかと言えば、そう単純ではない」ということを実感しています。私自身も悩みながらも職場の仲間と一緒に子どもたちの養育にあたってきました。

施設の現場で子どもたちと関わり続けてきた経験もあったので、里親として養育する困難さをある程度「想定内」として受け止めることができましたが、「こんなはずじゃなかった。これでいいのだろうか」など、ともに暮らすことによる子どもとの「距離」の取り方、自分自身に湧き上がるコントロールしにくい感情、学校を始めとする関係機関との連携等々、里親ならではの困難と苦悩に気づかされもしました。

その私が里親としてファミリーホームで何人もの子どもたちと関わり続けてこられたのは、元同僚や周囲の皆さんに支えられていると実感できたことが最大の要因です。不安がある時は正直に話し、悩みがあれば相談し、提案要望があれば伝え、手を貸してほしい時は臆することなくお願いします。そうすることで私自身の困り感を知ってくれているという安心感が得られ、気持ちが楽になりました。結果的に「開かれた養育」となったのだと思います。

里親による養育が推進されている一方で、里親の家庭というプライベート空間での養育となるため外からは見えにくく孤立してしまう危険があるとされています。孤立しないためには、抱え込むことはせず、周囲を巻き込み、養育をオープンにしていくという意識を持つことがとても大切で、それはまた、子どもの権利擁護にも繋がる重要かつ求められる養育スキルのひとつです。

我が家の子どもたちは、思春期真っ只中。心身の成長著しいその分、アンバランスでもあります。私が子どもたちの言動に一喜一憂し、思い悩み様々な人たちを巻き込みながら右往左往しているその間に子どもたちの方は何もなかったかのように私よりずっと先を歩いていることも・・・その姿はとても眩しく、そして逞しい!!

おそらく大人たちが思い悩むこの一連の作業が子どもたちにとっての成長には欠かせないことで、そこに里親としての役割と醍醐味があると感じてもいます。

つい数日前まで「真夏日更新」という日々でしたのに、今日は 12 月の気温に・・・私はあまりに乱高下の激しい気候に体調を崩してしまいました。 これから本格的な冬のシーズン到来です。クリスマス、お正月と私たちにとっては一段と忙しい季節を迎えることとなりますが皆様、健康にはお気をつけてお過ごしください。